天野用

平成３０年１１月９日

平成３０年「まほろば会秋の見学旅行」資料

九州北部を巡る旅（唐津・糸島地区、福岡・筑紫地区、宗像地区）

平成３０年１１月９日（金）～１１月１１日（日）

まほろば会

はじめに

今回の見学旅行は、「九州北部を巡る旅」と銘打って、昨年に続き恐らく当会としては初の企画となる「九州北部のみにスポットを当てた見学旅行」を試みました。「世界遺産の沖ノ島」までは行くことは出来ませんが、「日本列島への文化流入と対外交流の窓口を探る旅」というコンセプト（高川幹事プロデュース）のもと、玄界灘沿岸などの遺跡を精力的に回ります。

そして、時代はかなり下りますが「元寇の時の防塁」を見たり、彼の豊臣秀吉が朝鮮半島に戦を仕掛けた一大基地「名護屋城」なども見学します。

旅行初日は先ず「唐津の国史跡：菜畑遺跡」の見学から始まります。菜畑遺跡は、日本最古の水稲耕作遺跡として有名で、ここでは従来の縄文時代の水田跡が発見されています。初日はかなり強行軍ですが、そこから「名護屋城跡」へ回ります。太閤豊臣秀吉が文禄の役の前に築かせた平山城で、国の特別史跡に指定され「日本の１００名城」にも選ばれています。

初日には、そのほか「伊都国歴史博物館」（平原遺跡で発掘された国宝の内行花文鏡などを展示）、「三雲・井原（いわら）遺跡」（国史跡で弥生時代中期後半[約２０００年前]の伊都国王の墓？）、「平原遺跡」（国史跡で弥生時代後期の遺跡。福岡県平原方形周溝墓出土品のすべてが国宝に指定）を見学します。

二日目には、「漢委奴国王」銘の「金印」であまりにも有名な「金印公園」そして「志賀海神社」を散策し「真贋論争？」に決着をつけましょう！　１２月には２冊目の「本」を発刊される高川幹事からのとても興味深い話をお楽しみください。参道での昼食をはさんで「太宰府天満宮・九州国立博物館」をじっくり見学し、午後は「水城跡」「奴国の丘歴史資料館」「板付遺跡」を巡り、彼の「神風？」が吹いたと言われたことで有名な「元寇」の防塁をバスから降りて皆で歩いて見学します。ほかに「福岡市博物館」にも足を延ばします。

なお、二日間とも宿泊は今年３月にグランドオープンした「エスペリアホテル博多」（博多駅から徒歩３分。ベッドはドイツ製のシェララフィアとのこと）です。

最終日には、「海の道・むなかた館」（世界遺産「沖ノ島」宗像と関連遺跡群のガイダンス施設）そして大島（中津宮）を望める「海浜公園」をゆっくりと見学し、「宗像大社」（神宿る島「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界文化遺産登録が決定！）と延べ８万点にもおよぶ沖ノ島神宝が常時展示されている「神宝館」で国の宝に触れ、午後は「宮地嶽神社（古墳）」（古墳時代終末期の円墳）などを高川幹事の名解説で見学する見どころ満載の１日です。

２泊３日の「九州北部を巡る旅」を十分にご堪能ください。

幹事一同

旅程

第1日目(11月9日・金)　12:30 福岡空港 集合
唐津地区
　①菜畑遺跡(末盧館)　②名護屋城址(記念館)
糸島地区
　③伊都国歴史博物館　④三雲井原遺跡　⑤平原遺跡

第2日目(11月10日・土) 福岡・筑紫地区
　①金印公園 ②志賀海神社 ③大宰府天満宮 ④九州国立博物館 ⑤水城跡
　⑥奴国の丘歴史資料館 ⑦板付遺跡 ⑧元寇防塁 ⑨福岡市博物館

第3日目(11月11日・日) 宗像地区
　①海の道・むなかた館 ②海浜公園 ③宗像大社 ④神宝館 ⑤田熊石畑遺跡
　⑥新原奴山古墳群　⑦宮地嶽神社(古墳)

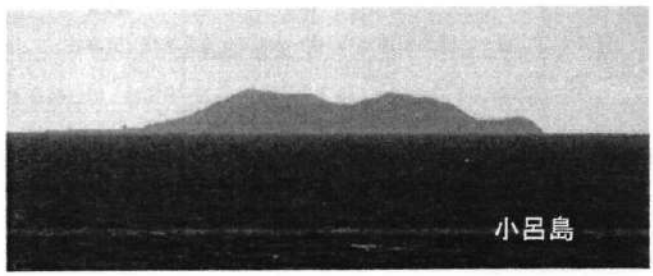
玄界灘沿岸地域の歴史　概要

旧石器時代（3．8万年前～1．5万年前）
　朝鮮半島から狭い対馬海峡を渡って人類がやって来た。

縄文時代（1．5万年前～2千7百年前）
　朝鮮半島との間に漁撈民の行き来があった。

弥生時代（BC8C～AD2C）
　水田稲作文化の到来。ついで金属器（青銅器鉄器）到来
　奴国や倭国王・帥升の朝貢外交（漢）
　※金印受領
　魏志倭人伝のクニグニ（末盧、伊都、奴、不弥）

古墳時代（AD3C～AD6C）
　※朝鮮半島抗争への介入
　沖ノ島祭祀（宗像）　磐井の乱（戦争）



飛鳥時代（AD7C）　※遣隋使　遣唐使
　　白村江の戦い

奈良時代（AD8C）　大宰府（遠の朝廷）と博多ノ津の繁栄

平安時代（9C～12C）　大宰府鴻臚館交易

鎌倉時代（13C～14C）　元寇（文永、弘安の役）

室町時代（14C～16C）　明との勘合貿易

安土桃山時代（16C）　朱印船貿易　朝鮮の役

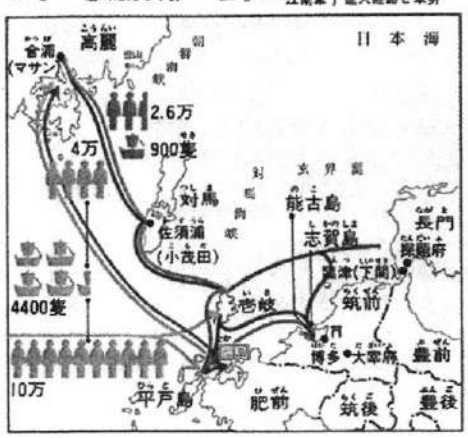
江戸時代（17C～19C）　朝鮮通信使

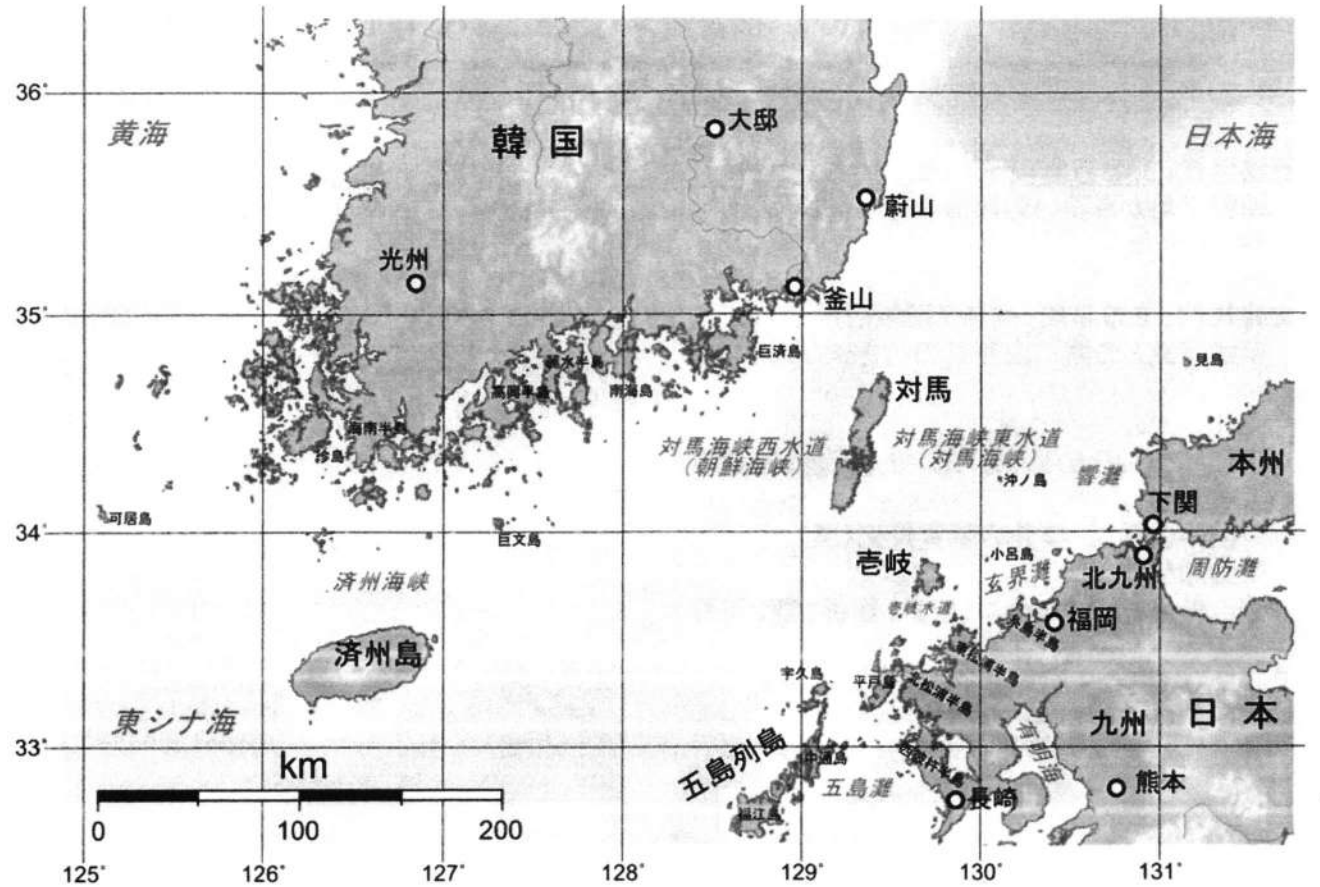
明治時代（19C～20C）　西南の役

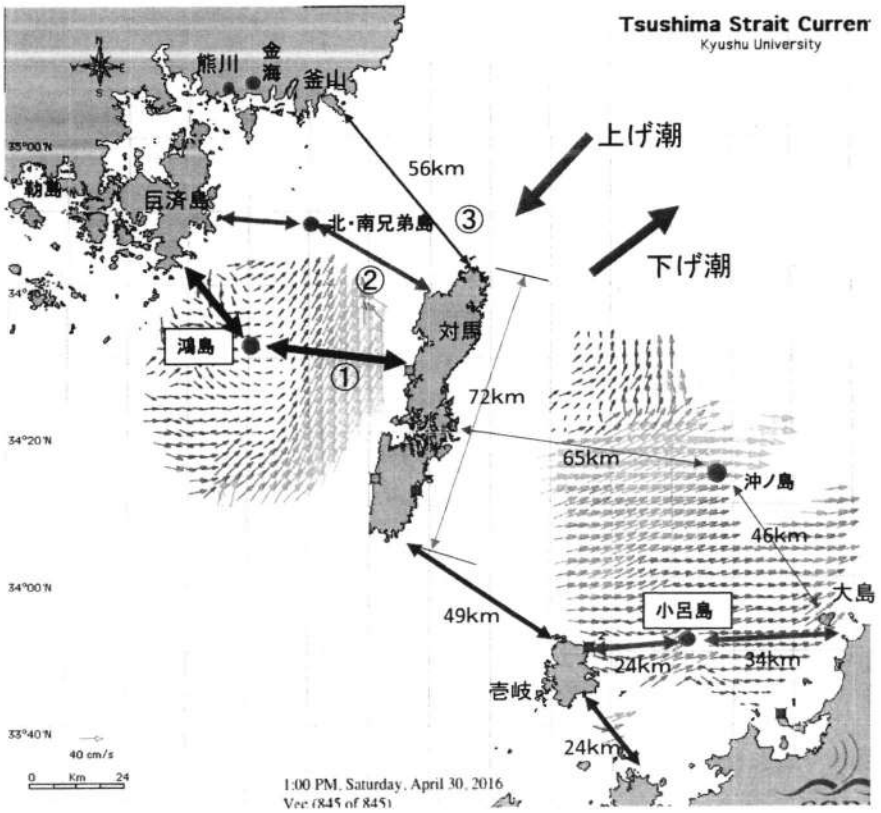
大正時代（20C）

昭和時代（20C）　日中戦争　太平洋戦争

元寇　元軍の進入経路　文永の役（1274年）弘安の役（1281年）
文永の役における進入経路と軍勢
東路軍
江南軍
弘安の役における進入経路と軍勢







沖ノ島・渡海ルートと小呂島バイパスルート

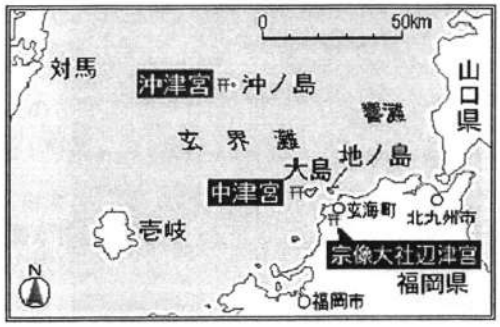
沖ノ島ルート

宗像（大島）と対馬を結ぶ中継地として沖ノ島を想定する考えがある。しかし、このルートは遠距離である上に、終始左回りの大渦の影響を受けやすく、通常使われるルートとしては厳しい。

小呂島ルート

宗像（大島）と壱岐を結ぶ中継地に小呂島を想定する。渦の影響をまったく免れることは出来ないが、距離は短く、伝統的な航路を利用できることからより安全なコースだと考える。

世界遺産　宗像大社・沖ノ島



■宗像大社は、交通安全をはじめ、すべての道をお守りする最も尊い神様として人々から篤く崇敬されています。

■宗像大社とは、玄界灘の沖合50キロに浮かぶ沖ノ島の「沖津宮（おきつみや）」、筑前大島の「中津宮（なかつみや）」、玄海町の宗像大社「辺津宮（へつみや）」の三宮を総称したものを言います。

■宗像大社は、天照大神（あまてらすおおみかみ）の御子神（三女神：宗像大神）が祭神となっています。
- **沖津宮には田心姫神（たごりひめのかみ）**
- **中津宮には湍津姫神（たぎつひめのかみ）**
- **辺津宮には市杵島姫神（いちきしまひめのかみ）**

※三女神の鎮座に関して、古事記、日本書紀（本文・一書）の記載は上記と一致しておりません。
■宗像大神をお祀りする神社は、全国6000余社有りますが、当大社がその総本宮です。

■地図を見ても分かる通り辺津宮から大陸まで一直線に並んでいる事から道主貴の別称もあり交通の神として有名です。

「貴」＝むち、とは神々に対する最高、最貴の尊称で、「道」とは国家発展、交通安全など国民のあらゆる道を示す意味であり国民を導く最も尊い神様と言うことになります。

沖ノ島祭祀

沖ノ島祭祀遺跡は、古代史の上では、大変重要な意味を持っている。なぜ、このような孤島で航海の安全や戦勝祈願などが国家的規模で行われたのであろうか。祭祀遺跡は四世紀後半に始まる。これは大和朝廷の国家事業であるが、それ以前はこの海域を支配していた豪族・宗像一族の祭祀の場であった。数こそ少ないが、縄文土器や朝鮮無文土器が出土していることからも、宗像あたりの海人族からは古くから知られていた様子が分かる。　おそらく壱岐や九州北西部の玄界灘沿岸あたりの海域で遭難・漂流した舟が海流に流され、そのうち運よく沖ノ島に辿り着いて助かった例が多々あったのであろう。このようなことが、語り伝えられているうちに、救命・救難の海神として宗像沿岸の人々の信仰となっていった可能性がある。　この島の海岸近くには、数か所の湧き水もあり、緊急時には数日間持ちこたえられるであろうが、元々海底岩盤の隆起によって出来た堆積岩と火山岩からなる島であり、定住生活を営む地としては不向きである。

古くから朝鮮半島との航海ルートを支配していたのは魏志倭人伝に出てくる末盧（唐津）伊都（糸島）奴（福岡・春日）不弥（糟屋）などの玄界灘に面した北西部地域の豪族であったし、航路上にある壱岐や対馬の豪族であった。列島各地への航路は、全て九州北部を起点として瀬戸内や日本海へ通じていたのである。

大和王権の立場からすると、三世紀代の連合王権の基盤造りから、四世紀を迎えて始まった半島南部との交渉において、その大事な通交ルートが旧来の九州・玄界灘勢力に握られている状況は好ましいものではなく、宗像勢力を抱き込んで独自の新しい航海ルートを開拓するという動きに出たものであろう。ただ、この場合でも直接武力に訴えることはせず、宗像のほか壱岐や対馬の一部豪族を巻き込んでの、なし崩し的なルート争奪戦を継続的に展開したのであろう。このことは朝鮮半島における倭系遺物からも分かる。三世紀までの良洞里遺跡などの倭系遺物は、小型仿製鏡や中広形銅矛など、弥生後期の北部九州で製作されたものが多かったが、四世紀に入ると大成洞古墳や福泉洞遺跡の墳墓群から巴形銅器や碧玉製石製品、筒型銅器など、いずれも畿内・大和を中心に分布しているものが出土するようになる。やがて、四世紀末になると、畿内各地からは朝鮮半島からの搬入土器が多種多量に認められることになる。この時初めて畿内勢力が半島との交流面で主導権を握ったことが読み取れるのだ。　（文責　高川）

田熊石畑遺跡（たぐまいしはた）福岡県宗像市

玄界灘東部の標高12mの台地上に所在する弥生時代中期前半の集落跡。6基の墳墓から銅剣・銅矛・銅戈の武器形青銅器が計15点出土し、ひとつの墓のまとまりから出土した点数としては日本最多級。平成22年2月22日には国の史跡に指定。

さらに2008年の調査では、青銅器の細形銅剣4本と銅戈1本が出土し、弥生時代中期前半（紀元前2世紀）の墓から出土した青銅武器としては最も数が多く、市教委は「一帯を治めた有力首長の墓だろう」としている。国内でこれまで1つの墓から複数の武器形青銅品が出土したのは、福岡市早良区の「吉武高木（よしたけたかぎ）遺跡」と福岡県古賀市の「馬渡東ケ浦遺跡（まわたりそくがうら）のみ。

大海原を舞台に活躍したムナカタ海人族とのつながりも指摘されている。

海の道むなかた館の西谷正館長は「1人の墓から5本の銅剣、銅戈が出土したことは、宗像の地域に相当有力な首長が存在したことを裏付けており貴重だ」という。

宗像市では、整備基本計画を作成し遺跡の保存、活用などを行っている。

田熊石畑遺跡の主な出土品

田熊石畑遺跡　墓域全景（西から）

新原・奴山（しんばる・ぬやま）古墳群

新原・奴山古墳群は、海を越えた交流に従事し沖ノ島祭祀(さいし)を担った古代豪族である宗像氏が、5世紀から6世紀にかけて築いた古墳群です。かつての入海に面した台地上に、前方後円墳5基、円墳35基、方墳1基からなる計41基の古墳が良好な状態で残されています。

大型の前方後円墳(22号墳)は、沖ノ島で岩陰祭祀が始まった5世紀後半に造られた古墳です。中型の前方後円墳(1号墳・12号墳・24号墳・30号墳)は6世紀前半～中頃に築かれました。台地の縁辺部に築かれた小型の円墳群(34～43号墳)は6世紀後半のものです。宗像地域でも数少ない方墳である7号墳からは、沖ノ島祭祀遺跡の出土品と共通した鉄斧が出土しています。

この台地上からは、大島、さらに沖ノ島・朝鮮半島へと続く海を一望することができます。

新原・奴山古墳群は、沖ノ島に対する信仰を支える宗像氏の存在を証明します。

高川　撮影

宮地嶽神社古墳

所在地:福岡県福津市宮司元町7　・時　期:6世紀後半
・時　代:古墳時代終末期　・形　状:円墳・　指　定:国の史跡
【概要】
丸塚古墳、宮地嶽大塚ともいい、古墳時代終末期の円墳である。津屋崎古墳群の一つとして国の史跡に指定されている。

6世紀末の築造と推定され、宮地嶽神社境内にある。径約34メートル、横穴式石室の長さが約22メートルもある。今日内部をみることの出来る横穴式石室のうち最大規模。

この種の埋葬施設で最大のものは奈良県橿原市にある巨大古墳「三瀬丸山古墳」で、約28メートル。巨石墳として有名な奈良県明日香村の石舞台古墳でさえ約20メートル。

この古墳の入口には、ガラス製の骨壺を収めた青銅製の骨蔵器も追納されており、被葬者は、宗像一族の首長墓と考えられている。

『日本書紀』天武天皇二年(673)正月条で帝紀を記している中に「次に胸形君徳善が女尼子娘を納して、高市皇子命を生しませり」とあり、被葬者は徳善であるとの説が有力。

金銅製馬具類、金銅荘頭椎大刀、長方形緑瑠璃板などの出土品が一括して国宝に指定されている。終末期古墳として最も豪華な副葬品。
現在、宮地嶽神社「奥の宮八社」の一つである不動神社がある。

宝冠

金銅製壺鐙

菜 畑 遺 跡（唐津）

菜畑遺跡（なばたけいせき）は、現在日本最古の水稲耕作遺跡である。佐賀県唐津市の西南部、JR 唐津駅から西に 2 キロメートルほどのところにあり、「国の史跡」に指定され従来の縄文時代の水田跡が発見されている。

本遺跡は 1979 年（昭和 54 年）に発見され、1980 年 12 月から 1981 年（昭和 56 年）8 月にかけて発掘調査が実施され、1983 年（昭和 58 年）に史跡に指定された。

魏志倭人伝に出てくる末盧国（まつろこく・まつらこく）に因んだ末盧館（まつろかん）という資料館が建てられ、この遺跡から出土した炭化米や石包丁、鍬、鎌などの農業用具ほか発掘に関連した資料が展示され、竪穴式住居や水田跡も復元されている。

遺跡は、海抜 10 メートル前後の谷底平野に面した、緩やかな丘陵斜面に立地している。
縄文時代晩期後半、谷底平野には湿原が広がっており、背後の丘陵には照葉樹林が育っていた。谷底平野の斜面下部や低地の縁辺で、陸稲的な状況でイネの栽培が始まった。

縄文時代晩期終末に入ると雑草の種子は大半が水田雑草で占められる。
弥生時代早期初頭（従来の縄文時代晩期末）の水田跡の遺構は 16 層から成っており、水田の遺構が確認されたのは縄文時代晩期後半の 12 層からである。それより上層にも弥生時代中期までの水田遺構が検出された。水田遺構は 18 平方メートル余りで小さな 4 枚の田で、当時は直播きで栽培されたと推測されている。

花粉分析の結果、イネ属の花粉は夜臼式土器（柏崎式土器）以前から出現し、第 12 層の上部で突発的に増加する。このような突発的増加は人間が搬入したものと考えられる。一方、種子は第 12 層以下ではアリノトウグサ水湿性植物の種子が多く出た。

遺物の土器は、それまで最古の水田跡とされていた板付遺跡の夜臼式土器（柏崎式土器）よりも古い「山の寺式土器」であった。炭化米も 250 粒ほど出土し、そのうち 100 粒以上がジャポニカ種であることが分かっている。

1980 年～81 年の発掘で、従来縄文時代晩期末とされた地層から、大規模な水田が営まれていたことを裏付ける水路、堰、取排水口、木の杭や矢板を用いた畦畔（けいはん）が発掘され、日本で初めて水田耕作による稲作農業が行われていたことを実証するものと考えられている。

名　護　屋　城　跡

名護屋城（なごやじょう）は、肥前国松浦郡名護屋（現在の佐賀県唐津市（旧東松浦郡鎮西町・呼子町）、東松浦郡玄海町）にあった日本の城。太閤豊臣秀吉が文禄の役を始める前に築かせた。現在、国の特別史跡に指定されている。平成18年（2006年）には日本100名城に選定された。

名護屋（古くは名久野）は海岸線沿いに細長く広がる松浦郡の北東部の小さな湾内に位置し、中世には松浦党の交易拠点の一つであった。ここにはもともと松浦党の旗頭・波多氏の一族である名護屋氏の居城、垣添城があったが、豊臣秀吉は大陸への進攻を企図した際、ここを前線基地として大掛かりな築城を行った。

名護屋城は波戸岬の丘陵（標高約90メートルほど）を中心に170,000平方メートルにわたり築かれた平山城の陣城である。五重天守や御殿が建てられ、周囲約3キロメートル内に120か所ほどの陣屋がおかれた。 城の周囲には城下町が築かれ、最盛期には人口10万人を超えるほど繁栄した。

秀吉の死後、大陸侵攻が中止されたために城は廃城となったと考えられており、建物は寺沢広高によって唐津城に移築されたと伝わる。石垣も江戸時代の島原の乱の後に一揆などの立て篭もりを防ぐ目的で要所が破却され、現在は部分が残る。歴史上人為的に破却された城跡であり、破却箇所の状況が復元保存されている。

天正15年（1587年）豊臣秀吉は九州の役で島津義久を降した後、天正18年（1590年）小田原の役において奥州伊達政宗を服属させ、北条氏直を降し徳川家康を関東に移封して天下統一を成し遂げた。国内統一の途中においてすでに秀吉は世界に目を転じており、九州平定以来「高麗」つまり李氏朝鮮に服属と明征伐への協力を要請したが朝鮮は拒絶した。その後も対馬の宗義調らが複数の交渉を重ねるが、朝鮮側は拒絶の意志を変えなかった。なお秀吉は同様に琉球や呂宋や高山国（台湾）にも使者を出した。

宗義智から交渉決裂を聞いた秀吉は、天正19年（1591年）8月「唐入り」を翌年春に決行することを全国に告げ、肥前の名護屋に前線基地としての城築造を九州の大名に命じた。秀吉は自分の地元那古野と同じナゴヤという地名を奇遇に感じ、城の立つ山の名前が勝男山と縁起がいいことにも気を良くしこの地への築城を決めたのだが、この地の領主であった波多親はこれに反対したため不興をかった。

また甥の内大臣豊臣秀次に関白を譲って自らは太閤となった。9月、平戸城主松浦鎮信に命じて壱岐

の風本に城を築かせた。その築城の担当は、松浦鎮信、日野江城主有馬晴信、大村城主大村喜前、五島城主五島純玄であった（宇久純玄はこの年、姓を五島に改める）。なお、城跡から出土した瓦に「天正十八年」の銘があるものが発見されたことから、築城開始時期が通説の天正19年より早かった可能性も考えられている。

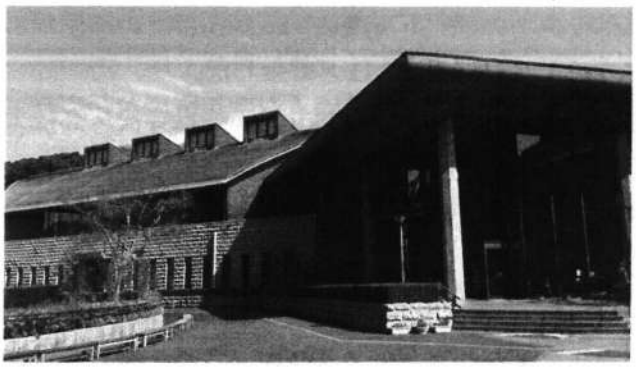
10月上旬、全国の諸大名が名護屋へ到着し、城普請に取りかかった。『松浦古事記』によれば、20万5,570あまりの兵が高麗へ渡り、名護屋在陣は10万2415兵で、総計30万7,985兵で陣立てされた。築城に際し、縄張りを黒田孝高、そして黒田長政、加藤清正、小西行長、寺沢広高らが普請奉行となり、九州の諸大名を中心に動員し、突貫工事で8か月後の文禄元年（1592年）3月に完成した。

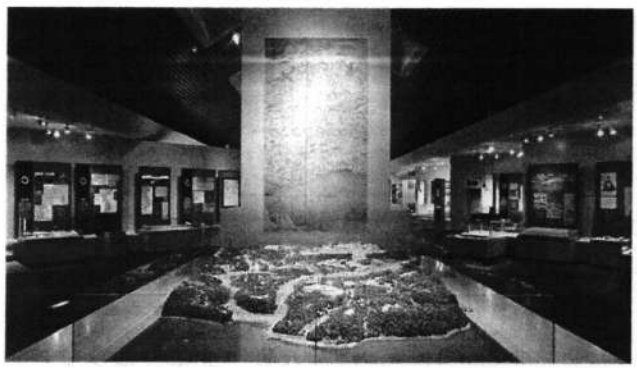
規模は当時の城郭では大坂城に次ぐ広壮なものであった。ルイス・フロイスが「あらゆる人手を欠いた荒れ地」と評した名護屋には、全国より大名衆が集結し、「野も山も空いたところがない」と水戸の平塚滝俊が書状に記している。唐入りの期間は、肥前名護屋は日本の政治経済の中心となった。

朝鮮撤退後この地は寺沢広高の治めるところとなった。関ヶ原の戦いの後、慶長7年（1602年）、広高は唐津城の築城を開始した。この際に名護屋城を解体しその遺材を使用した。これ以降に、二度と城が利用できないように要となる石垣の四隅を切り崩すなどの作業が行われたが、その理由と時期については明確でない。

岸田家文書によると、島原の乱直後に巡検した江戸幕府老中の指示で、一揆が起こった際に名護屋城が利用されないように破却したと記録されている。また、それ以前の一国一城令を受けての破却とも、名護屋城を破壊することで幕府が明国や朝鮮と関係を改善する意思表示をしたとの見方もある。また、大手門は伊達政宗に与えられ、仙台城に移築されたと伝わっている。

佐賀県立名護屋城博物館





佐賀県立名護屋城博物館は、特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」の保存整備事業と、文禄・慶長の役及び日本列島と朝鮮半島との長い交流の歴史を調査・研究・展示紹介し、日韓の学術・文化の交流拠点となることを目的として平成5年10月に開館した。

特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」は、文禄・慶長の役の出兵基地であり、不幸な歴史の証人ではあるが、日本の歴史上最大規模の城郭関係遺跡群という特徴ももっている。名護屋城博物館では、名護屋城跡のほか諸大名の陣跡、関連遺跡の発掘調査・保存整備に取り組んでいる。

伊都国歴史博物館

伊都国歴史博物館について

・昭和62年7月「伊都歴史資料館」として開館。初代館長は平原遺跡発掘の功績により原田大六氏とされましたが、開館前日に亡くなったため、銅像が制作されました
・旧館と新館とからなります
・新館3階に上るエスカレーターは狭く薄暗く作られており、効果音とともに現代と伊都国を繋ぐタイムトンネルとなっています
・新館4階には周囲の山々と糸島平野を見渡すことが出来る展望スペースがあります

見どころ

①平成18年6月に国宝に指定された国史跡平原遺跡出土品
②圧巻の40枚の銅鏡（全て国宝）
③日本一大きな銅鏡である大型内行花文鏡（5面）
④国宝に指定された平原遺跡出土品の復元模型
⑤国内最大級の素環頭太刀（そかんとうのたち）

伊都国と言えば・・・・

糸島と言えば牡蠣小屋が有名ですが、伊都国と言えば邪馬台国派遣の総督である一大率があったことで有名です　当時千戸あったとのことです
魏氏倭人伝によると魏の使いは末盧国から九州に上陸し、それから陸路五百里で伊都国に到着し、そこで送迎を受けそのまま留まったとのことです
つまり、魏の使いは、その後の奴国・不弥国・投馬国・邪馬台国には行っていないとの説が一般的です
ただ、このことと一大率の解釈には諸説ありますが・・・

三雲・井原遺跡

三雲・井原遺跡とは

糸島市三雲の瑞梅寺川沿いにある弥生時代の拠点集落。魏志倭人伝に登場する伊都国の王都があったとされており、多くの甕棺墓や外交文書作成用の硯の破片（国内最古級）、副葬品などが出土しています。2017年に国史跡に指定されました。三雲遺跡からは、前漢時代の鏡35面と銅剣、銅鉾、ガラス璧、勾玉、管玉などが多数出土しています。当時鏡はまさに権力を象徴するものであり、この地に一大勢力の集落があったことを表しています。井原遺跡からも多くの甕棺とその副葬品である銅鏡や銅剣などが出土しています。三雲・井原遺跡群の番上地区では、楽浪系土器が特定箇所で集中的に出土しており、渡来した楽浪人が集団で居住していたことを示しているのかもしれません。奴国＝鉄器：朝鮮半島　伊都国＝外交・交易：前漢　ということか・・・

①三雲南小路遺跡

江戸時代の文政5年に発見されました。この墓は弥生時代の中期後半（約2000年前）に造られたもの。発見された甕棺の大きさは高さが90cm以上、胴の直径が60cmほどもある巨大なもので、その巨大な甕棺が二つ、口を合わせて埋められていました（1号甕棺）。中からは、銅鏡35面、銅鉾2本、勾玉1個、管玉1個、ガラスの璧8枚、金銅製金具などが出土しています。その150年後の昭和50年、新たに2号甕棺が発見されました。2号甕棺も高さ120cm、胴の直径が90cmの巨大な甕棺二つを口を合わせて埋めたもので、副葬品として銅鏡22面以上、璧玉製の勾玉1個、ガラス製の勾玉1個、ガラス製の管玉2個、ガラス製の垂飾1個が出土しています。この甕棺は墳丘の中に埋葬されており、墳丘は東西32m×南北22mの長方形をしていたと推定されます。当時としては巨大なもので、この巨大な墳丘は2基の甕棺の埋葬のために造られたものと考えられます。また、埋葬品からここは王と王妃の墓だとされています。伊都国の王墓は三雲、井原、平原と変遷して、卑弥呼出現の2世紀おわりには平原が伊都国の王都だったということになります。

②井原鑓溝遺跡

江戸時代の天明年間（1781-1788）に農民により銅鏡を多数副葬した甕棺が発見されました。このときの出土品は現存しませんが、「柳園古器略考」（三雲南小路遺跡跡1号棺の調査報告書）に図面が記録されています。『天明年中に井原村の次市という農民が日照りで水が不足していたので、鑓溝というところで水口を開こうと棒で突いたところ、岸から朱が流れ出た。怪しんで掘ってみると一つの壷が発見され、中から古鏡数十、鎧の板の如きもの・刀剣の類が出土した。鏡の破片は数百片で、中には全うきものあるが、側で見物していた者等が取ろうとして終には無くなった。その破片は彼農民の家にあり、そのうちの小片を拓本墨を用いて載せる。文政6年4月』

平原遺跡

平原遺跡とは

昭和40年に農作業の最中に偶然大小鏡の破片等が発見され、原田大六を中心に学術調査がなされました。最終的に5基の墳丘墓が発見され、1号墓のみが墳丘墓として復元管理されています。多数の出土品の全てが「福岡県平原方形周溝墓出土品」として2006年に国宝に指定されました。(伊都国歴史博物館保管)

1号墓

遺構は、東西18m、南北14mの長方形の方形周溝墓です。出土した大型内行花文鏡はその文様と大きさ(径46．5cm)から、伊勢神宮八咫鏡と同型と思われます。また、副葬品の多くが勾玉、瑪瑙管玉、耳とう(ピアス)等の装身具であり、武器類が少ないため、埋葬された人物は女性であると考えられており、原田大六はこの墓の主を伊都国の女王(＝玉依姫＝オオヒルメノムチ＝天照大神)としています。(九州説では、卑弥呼の墓との説もあります)

大型内行花文鏡は八咫鏡？

いわゆる三種の神器のうちでも至高の品とされる「八咫鏡」は伊勢神宮の神宝です。原田大六は、この鏡こそ平原出土の大型内行花文八葉鏡(直径46．5cm)であろうと推察しています(実在した神話)。両手の親指と食指を使った際のリングの弧の長さが1咫。漢代の資料から八咫は147．2cmとなり円周率を使って計算すると直径は46．7cmとなります。また、伊勢神宮の御鎮座伝記によれば、鏡は「八頭花崎八葉也」と記し、平原鏡の文様と同じです。

平原遺跡は卑弥呼の墓なのか？？

「ある説によると・・・」

★まず、伊都国の女王の墓でない理由

・伊都国に王がいたのは2世紀以前であり倭国大乱以降、伊都国に女王がいたことを示す文献上の証拠はない。(『三国志』魏書東夷伝倭人条に官の紹介はあるが王の紹介がない：卑弥呼の時代は伊都国は邪馬台国に従属していた)当遺跡は3世紀に作られており、これを伊都国女王の墓と見做すことには無理がある。

・平原遺跡1号墓は、これまで伊都国王の王墓が発見された三雲遺跡や井原鑓溝遺跡がある怡土平野の中央部ではなく、その北西側の曽根丘陵の上にある。なぜ、女王の墓が中心部ではなく、低くて平坦な西側斜面に造られたのか不可解。

★卑弥呼の墓である理由

・出土した前漢鏡は中国でもトップクラスのもので、平原の王が中国の外臣でも上位と扱われた証拠であり、卑弥呼以外は考えられない。

・当墳墓は3世紀のものであり、卑弥呼が死亡した248年前後と重なる。

・三種の神器(八咫鏡・素環頭太刀・八坂勾玉)のようなものが出土している。

・その他色々ありますが、紙面の都合で割愛します。

【九州国立博物館】

独立行政法人国立文化財機構が運営する。２００５年１０月に太宰府天満宮が所有する丘陵地に建設された。国立文化財機構が運営する国立博物館としては１８９７年設立の京都国立博物館以来、１０８年ぶりに新設された。同機構が運営する国立博物館の中で、最大の敷地面積と、一つの建物しては３０，０８５平方メートルと最大の延べ床面積を持つ。（ただし、東京国立博物館の５つの展示室の合計延べ床面積、および同機構の運営ではないが、国立歴史民俗博物館、国立民族学博物館の延べ床面積のほうが大きい）

東京・京都・奈良の３つの博物館は、どちらかと言えば美術系博物館であるのに対し、九州国立博物館は歴史系の収蔵物を主とした博物館であること。九州が日本におけるアジア文化との交流の重要な窓口であった歴史的かつ地理的背景を踏まえ、旧石器時代から近世末期（開国）までの日本の文化の形成について展示している。国宝や重要文化財など歴史的な資料を観るだけでなく、ワークショップなど体験を通じて歴史を知ることができる。展示は平常展と年４回テーマを変えて実施する特別展に大別される。

今回の必見！展示として：「宮地嶽（みやじだけ）古墳」（３日目見学予定）の出土品一括は国宝に指定され、同博物館に寄託されている。＜重要＞

その他、文化交流展特別展示として「太宰府研究の歩み、大宰府史跡発掘５０年記念特別展示」（無料）。また特別展をとして「オークラコレクション」（観覧料は別途、今回は見学しません）を開催しています。

【太宰府天満宮】

所在：福岡県太宰府市太宰府。創建：延喜（えんぎ）１９年（９１９年）安楽寺天満宮として。主祭神：は菅原道真。社格：旧官幣（かんぺい）中社。

＊旧社格とは明治維新以降新たに等級化した制度。戦後この制度は廃止された。

江戸時代の終わりころまで安楽寺天満宮と呼ばれていたが、宮がつく神社は、皇族を祀る神社しか使用できなかったこともあり、明治４年（１８７１年）には太宰府神社と名称変更となり、神社の国家管理が廃止されて戦後の昭和２２年（１９４７年）に天満宮となった。

太宰府天満宮と菅原道真　＜どうして菅原道真は怨念から学問の神様になった？？＞

菅原道真は承和１２年（８４５年）京都に生まれた。幼少期より学問の才覚を発揮し、学者・政治家・文人として能力を発揮した。５歳の時に和歌を詠んだことなどから神童と称されその名を馳せます。若き頃讃岐国長官として能力を発揮し、疲弊した讃岐を立て直したとされる。

学問に秀でた貴族として、それらの実績から中央では文章博士（もんしょうはかせ）右大臣兼右近衛（うこんえ）大将へと破格の昇進をするに至る。

しかしながら、昌泰４年（９０１年）陰謀により、太宰権師（だざいのごんのそち）に左遷されされた。赴任後の延喜３年（９０３年）濡れ衣が晴れないまま死亡、安楽寺に葬られた。

遺骸を安楽寺に葬ろうとすると葬送の牛車の牛が同寺の門前で伏して動かなくなり、これは道真公の御心によるものであろうと、この地に埋葬されたとの言い伝えがある。

一方、都では疫病や飢饉が発生し、左遷させ権料闘争に関わった人々が死去するなど不吉なことが相次ぎ、朝廷は「道真の祟り」だとして恐れるようになり、延喜（えんぎ）１９年（９１９年）安楽寺天満宮を建立して供養することになった。

猛威を振るう怨霊は鎮まらず道真には太政大臣追贈などの慰撫措置が行われ、道真への御霊信仰は頂点に達した。西暦元年(９９０年)頃からは、本来は天皇・皇族を祀る神社の社号である天満宮も併用されるに至った。

道真の御霊に対する恐れが少なくなってきた中世頃から、道真が生前優れた学者であったことにより学問の神としても信仰されるようになった。

＜天神様と牛＞

・・・・・天満宮には必ず牛の像がありますね・・・なぜ？・・・

・菅原道真（道真公）の生まれた年が丑年。

・道真公のなくなった日が丑月の月の丑の日。

・太宰府に左遷されたとき、牛に乗ってきた。

・道真公のお墓の場所を牛が決めた

・道真公が日頃牛を可愛がっていた　　等々　　以上

【 水 城 跡 】

日本書紀に『天智三年（６６４年）　対馬嶋（つしまのしま）、壱岐嶋（いきのしま），筑紫国（つくしのくに）などに防（さきもり）と烽（とぶひ・・のろし）を置く。また、筑紫（つくし）に大堤（おおつつみ）を築きて水を貯えしむ。名づけて水城（みずき）と曰う。』と記載された城である。すなわち、『対馬、壱岐、筑紫の国などに防衛のため兵士を派遣し、通信手段のために「烽台」を設置した。また、筑紫に大きな堤防を築いて、水を貯えさせた。水城という。』となる。

水城は今の福岡県太宰府市、大野城市、春日市にまたがり、天智３年（６６４年）に築城されたと言われる。城跡は昭和２８年（１９５３年）国の特別史跡「水城跡」に指定されている。

唐と新羅の攻撃に備えて全長１，２キロメートルにわたり築かれた太宰府の防衛施設です。朝鮮半島で唐・新羅連合軍に大敗した白村江（はくすきのえ）の戦い（天智２年・６６３年）の翌年に造築された。翌年、大野城も造築されている。

白村江の敗戦後、唐・新羅軍侵攻の脅威があり、防衛体制の整備が急務であった。

水城は大野城のある大城山と西側の大野城市牛頸(現在)地区の台地の間の、一番狭いくびれ部を塞ぐ形で造られている。規模は全長１，２キロメートル、基底部が幅８０メートル、高さ１，３メートルを超える人口の土塁（堤防）を築き、その博多湾側にはば６０メートル、深さ４メートルの外濠を造り、貯水した。

また、水城には門があった。東門と正門の２か所しかない大変厳重な施設であったことがうかがえる。

当時、様々な防衛体制の整備につき、百済から逃れてきた亡命者の技術を借りたとされています。水城もその一つとされています

天智政権は白村江の敗戦以降、唐・高句麗・新羅の交戦に加担せず、友好外交に徹しながら対馬～北部九州～瀬戸内海～畿内と連携する防衛体制を整えることになる

西門(調査)

木樋（すいとう）

堤防構造図

《新発見　太宰府を守る土塁　羅城の存在がクローズアップ》

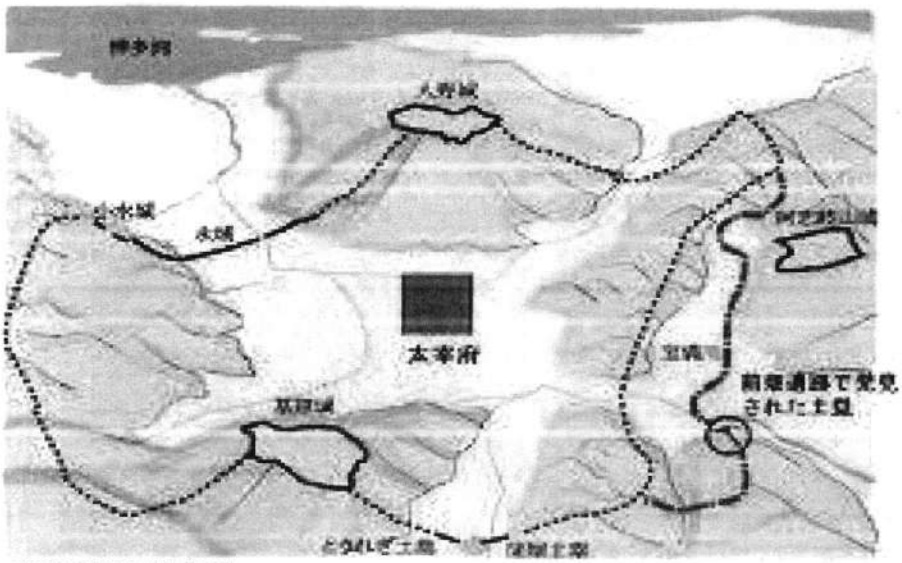
平成２８年（２０１６年）１１発、大宰府政庁跡の南東約７キロの丘陵地で、七世紀のものとみられる大規模な土塁が発見された（前原遺跡・筑紫野市)。長さ５００メートル、高さ１３．５メートル。

平成１１年（１９９９年）には、その北方にある山で阿志岐山（あしきさん）城と名付けられた遺構が見つかっており、大宰府政庁とその周辺を大きく取り込んだ羅城（らじょ

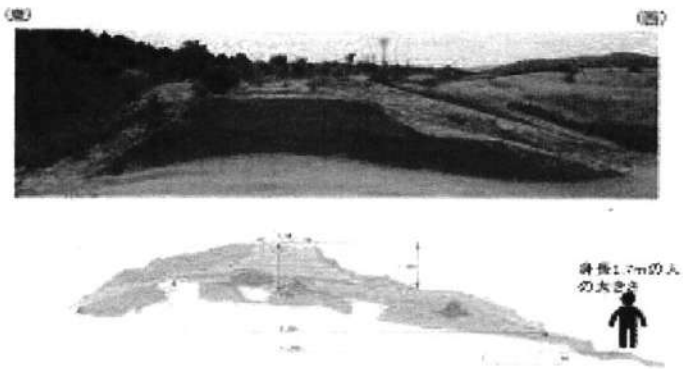
う）の存在がクローズアップされてきた。

実は周辺では小水城（しょうみずき）などと呼ばれた土塁の存在が古くから知られており、羅城の一部ではないかとの見方もあったが、このような発見により、わが国ではなかったと言われてきた羅城の可能性が高まってきたのは確かであろう。

このように、山城を結ぶ土塁が大宰府政庁の周囲を巡っていることを考えれば、南の有明海からの侵攻をも意識して防衛策を練ったのではないかと推測される。



太宰府羅上推定図

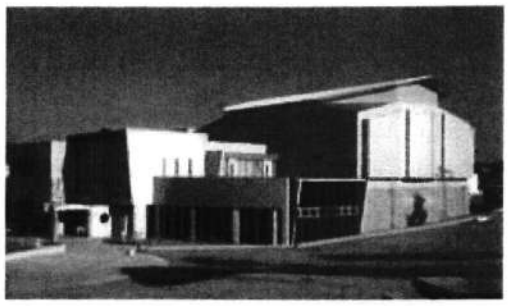


土塁断面図

以上

【春日市奴国の丘歴史資料館】

奴国は魏志倭人伝に出てくる倭の小国。春日市奴国の丘歴史資料館は、春日市内の遺跡から出土した埋蔵文化財や昭和初期の農具を中心とした民族資料を展示、収蔵しています。また、当資料館のある須玖岡本遺跡の一部は春日市奴国の丘歴史公園として整備しています。甕棺（かめかん）墓群を発掘した状態で見学できる覆屋や、奴国王墓の上石を保存展示しており、自由に見学することができます。（資料館ホームページより）



【板付遺跡】

福岡市博多(はかた)区板付に所在する弥生(やよい)時代の集落遺跡。御笠(みかさ)川西岸の標高11～12メートルの低台地を居住地とし、その東西の低地に広がる水田を生産の場とした、初期水稲耕作の実態を示す代表的遺跡として知られる。1916年（大正5）に弥生前期末～中期の甕棺墓(かめかんぼ)数基とともに銅剣、銅矛(どうほこ)各3口(こう)が出土し、初期金属器文化期としての弥生時代を設定し性格づける契機をもたらした。1951年（昭和26）からはほぼ連続的に調査が進められ、1958年に至る日本考古学協会の調査では、台地上に巡らされた東西81メートル×南北110メートルの長円形の環溝が検出され、縄文土器と弥生土器の接点が確認された。1978年には台地下で弥生時代初頭の水田跡と、さらにその下層から縄文時代晩期の水田跡が検出され、稲作の起源、ひいては弥生時代開始の問題に新たな一石を投じている。このように板付遺跡は弥生時代研究の進展に最初の契機を与え続ける最重要の遺跡である。1976年国の史跡に指定された。（高倉洋彰）

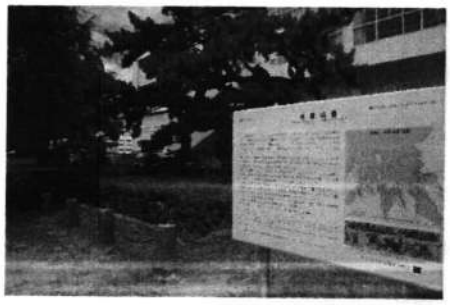
復元した住居

復元した田

（写真提供：福岡市）

【元寇防塁】

元寇防塁（げんこうぼうるい）は、鎌倉時代に北部九州の博多湾沿岸一帯に築かれた石による防塁。蒙古襲来（元寇）に備えて築かれた。弘安の役の際には防塁が築かれたところからはモンゴル・高麗軍は一切上陸することができなかった。昭和 6 年(1931 年)に国の史跡に指定。「元寇防塁」は平山平次郎の命名で、石築地（いしついじ）が本来の呼び名である。



（☜西新付近の原稿防塁、提供：福岡市）

【福岡市博物館】

福岡市博物館は、平成 2 年(1990)の 10 月に、地域の歴史と民俗を研究・展示する博物館として開館しました。また、常設展示は、平成 25 年(2013)、内容を刷新しました。
福岡は、弧を描く日本列島の西の端にあり、ユーラシア大陸と朝鮮半島に近接しています。この地に住む人々は、古来、この国の誰もが知らなかった文化に最初に触れ、経験したことのない生産手段や経済活動を発展させ、遭遇したことのない脅威を克服し、豊かな都市を営みつづけてきました。

この博物館は、アジアとの人・もの・文化の交流がつくってきた特色ある歴史と、そこに生きる人びとのくらしを、さまざまなかたちで発信しています。（博物館ホームページより）

【金印】

教科書に登場する最もポピュラーな国宝、それが金印です。その特徴を三つあげるとすれば、黄金で、五つの漢字が刻まれていること、それと鈕（つまみ）が蛇をかたどっていることがあります。福岡市博物館の常設展示の入場者数から単純に割り出すと、一辺 2.3 センチ、重さ 108 グラムの金塊に年間、十数万人の視線が注がれている計算になります。

☜展示物の目玉は何といっても「金印」（提供：福岡市）実物大